

ハンザ商人の係争事件

松 田 緝

1.

6袋の羊毛を受け取ったの、受け取らぬとの悶着に端を発した商品取引を廻るハンザ商人間の係争が、十数年に亘る裁判沙汰となって黒白が争われただけでなく、関連する事件の落着は40年近くも先のこととなり、その訴訟記録は厚さ10センチもの文書となって残されている¹⁾。これを採り上げたピッツ Ernst Pitz のモノグラフィー „*Ein niederdeutscher Kammergerichts-prozeß von 1525*“ に依拠して²⁾、この奇妙にして厄介な事件を観察しようとする所以は、近世初期のハンザ商人の一類型を確認すると共に、北欧商業の具体像をその歴史的関連において把握せんとするに在る。この事件を奇妙と云うのは、裁判沙汰のため当事者の商売は破綻して共に零落してしまったのであるが、紛争の出発点となったのは、今日の商取引では考えられぬ商品引渡の行き違いだからであり、厄介と称するのは、この事件が封建諸侯のフェーデ Fehde やハンザ都市に対する帝国アハト Reichsacht までも含んでいるうえに、アムステルダム Amsterdam の都市裁判所から帝室裁判所 Reichskammergericht までの法廷の審理の記録に見られる当事者双方の相反する主張から真実を探し出すことは、ネーデルラント Nederland と北ドイツでは司法制度が同一でないこととも関連して、容易ではないからである。法制史に疎い筆者としては、視点を商取引に定めて、こういう取引の行なわれた社

会経済的環境に接近を試みることにしたい。

- 1) この文書はハノーフェル Hannover の das Niedersächsische Staatsarchiv に保管されて Prozeßakten A 1014として次の標題を有する „Joachim Apenburg(Apenborch), Bürger zu Hamburg, Beklagter und Wiederkläger, contra Hartmann・Hartich(Hartig) und Hermann Rathke(Rateken), beide Bürger zu Lüneburg, Kläger und Wiederverklagte, wegen gegenseitiger Lieferungen und dem Saldo aus kaufmännischen Geschäften, (1518)1520 – 1555.“
- 2) 本書は „*Beitrag zum Problem der rechtsgeschichtlichen und wirtschaftsgeschichtlichen Auswertung der Reichskammergerichtsakten*“ という副題をつけ Veröfentlichungen der niedersächsischen Archivverwaltung, Heft 28 として 1969 年に刊行された。

2

原告ハルティゲス Hartmann Hartiges 及びラートケ Hermann Ratke は共にリューネブルク Lüneburg の市民で共同企業 ene masshopp を営んでいて、主な取引先はネーデルラントであった。裁判記録に見られる通り、2人のうちラートケの方が訴訟で主導権を握っていたが、それは商売でも同様であった。被告アペンブルク Joachim Apenburg はアルトマルク Altmark の出身で¹⁾、故郷の村で農産物の集荷を営んだ後、馬丁すなわち運送人としてハンブルク Hamburg に移住して市民権を得²⁾、1518 年には毛織物商 Gewand-schneider の営業許可を受けた³⁾。しかし後にラートケが彼を「貧しい育ちのヴェンデ人」 „Wenden von armer Herkunft“ と呼んだように⁴⁾、所詮は成り上り者で、ラートケのように読み書きが充分できる訳でなく、このことが紛争の種となった取引の行き違いにも関係した。

- 1) 「Joachim の故郷 Groß-Apenburg は、Jeetze 河の支流 Purnitz 川に沿う Salzwedel の南に在り、ここで東西に走る地方街道が沼の多い谷を横切っている。ハンザの大通商路は村を通っていないが、Hamburg 及び Lüneburg から Salzwedel を経て Gardelegen, Magdeburg 及び Leipzig に至る街道は直ぐ東側を通り、Salzwedel から Braunschweig への道は、村から半日旅程ほど西の処を通っていた。」 E. Pitz, *Ein niederdeutscher Kammergerichtsprozeß von 1525*, 1969, S. 17–18.
- 2) アペンブルクの2人の姉妹は故郷で「運送人 Caspar 及び Joachim Vorman に嫁ぎ、

彼らはまたハンブルクに親戚がいて、この者たちはヨアヒム・アペンブルクと取引で親しかった。」 E. Pitz, *a. a. O.*, S. 13.

- 3)「ハンブルクでアペンブルクは急速に出世したようだ；1518年に彼は参事会から毛織物商職を得るために 5lb. 12s. という相当な金額を市の会計課に支払ったが、それにはハンブルクでは顧客が欺かれる危険のないように 300 Mark lübisch の、保証に入っていない現金資産の証明を出さねばならなかった。多分アペンブルクは当時すでにハンブルクに自分の家を有していたろう、何故なら毛織物商はとくに、もはや市役所の貸店で行われたのではなく、有資格者によって『家屋か地下室かで』 „in enem huse edder enem kellere“ 営まれねばならなかった。」 E. Pitz, *Ebenda*, S. 13-14.

- 4) E. Pitz, *Ebenda*, S. 13.

第1審の訴訟記録から読み取れる訴訟の前史は以下のような取引を報告している。ハルティゲスとラートケは1517年にセーラント Seeland のブラウエルスハーフェン Brouwershaven のヨハンセン Daniel Johannsen に対し、商品取引の清算債務 24 ポンド Pfund Groten flämisch があり、これは翌1518年の復活祭 Ostern（4月4日）にベルヘン・オブ・ゾーム Bergen-op-Zoom の Paschenmarkt で支払うことになっていた。ラートケは1517年にヨハンセンの他にアムステルダムのシブランド Lutken Sybrand とともに業務を営んだ。これについては後にアムステルダムの法廷証言で（1518年5月22日）3人のアムステルダム市民がこう証言している⁵⁾、彼らは1517年11月11日頃シブランドの家で両人が取引の清算を行なっているのを見た。それは12袋の羊毛で、シブランドは彼の分である6袋を船頭ルートケ・フォン・レーデン Lutke von Reden の船とベルント・トム・ブローク Berndt tom Brook の船で3袋ずつ受け取ったことを認めた。袋は皆ラートケの商標を付けていた。また数日後の11月17日にフェーレ Veere 市におけるラートケの代理人クルーセ Jan Janß Cruse はハンブルクの船頭フレーゼン Hinrick Fresen の船からラートケの商標の付いた2袋の羊毛を受け取り、これをアムステルダムのリーベルヘン Paul vom Liebergen に送った。リーベルヘンは2週間程後にこれを受け取り、後にアントウェルペン Antwerpen の法廷での証言によ

ると(1520年7月6日),彼はこの2袋をベルヘン・オブ・ゾームにおいて持主のラートケに引き渡し,ラートケがシュトラールズント Stralsund のプルッツェ Jasper Prutze にこれを売却して金を受け取る時,この支払いに助力した。

5) 3人のアムステルダム市民とは Willem van dem Bosche, 甲冑師 Cornelius Adrianben 及び屋根職 Gerith Gertzen である。E. Pitz, *Ein niederdeutscher Kammergerichtsprozeß von 1525*, S. 16.

ヨハンセン, シブラント, プルッツェとの仕事を終えたラートケは, 冬季に入って船便は止まっていたのでリュネブルクに帰国した。帰ると直ぐラートケはハルティゲスと共に6袋の羊毛を購入して,これを西方に送って,その売上から代理人がヨハンセンの負債を支払う手筈であった。そこでリュネブルクの船頭ゲオルゲン Johannes Georgen がハンブルク迄運び,3袋はベルント・トム・ブローク,3袋はルートケ・フォン・レーデンの船に積み込んだ。ところがハルティゲスとラートケはゲオルゲンの船がリュネブルクを出た直後,ハンブルクから着荷報告を受け取る前に,羊毛の買手としてアペンブルクを見つけた。ハルティゲスとラートケはアペンブルクと一緒にリュネブルクにある公証人モラー Otto Moller の家で6袋の羊毛に関する売買契約を結んだが,後の紛争の種となったこの契約の文書は残っておらず,日時も1517年クリスマスと1518年2月11日~15日の間のことだとしか分からない。いずれにせよこの契約は,ハルティゲスとラートケの帳簿によると668 m. 4 s. で仕入れた6袋の羊毛を,アペンブルクがレイデン Leiden の毛織物 Laken 及び現金で購入し,24ポンドのヨハンセンの支払を引き受けるというものであった。同時に3者は共同企業の契約を結び,これについても文書は残っていないが,後の両当事者の訴訟文書は一致してこれを認めている。それによるとハルティゲスとラートケは羊毛その他の商品を購入して発送し,西方でこれを受け取ったアペンブルクがこれを換金して他の商品を購入して返送し,資本は3人各々500 m. lüb. とし,これは差し

当たりリューネブルクに置かれ、契約期間は1年間という契約であった。

さてハンブルクに送られた上述の6袋の羊毛は、そのラートケの代理人オルデン Joachim Olden によって、ホラント Holland のラートケの代理人ツィンメルマン Hans Zimmermann に宛てて発送の手続きが取られた。アペンブルクがこの羊毛の持主としてラートケの指図証券を携えてハンブルクに現われた時、2隻のうち一隻は3袋を積んで出港した後であり、もう一隻も3袋の積込を終って他の商品と一緒にあってアペンブルクは自分の商標を付けることは出来なかった。アペンブルクとしてはホラントにおいてツィンメルマンに指図証券を提示してこの羊毛を受け取る他はなかった。ところが1518年春ホラントに向かったアペンブルクは、彼の陳述によるとそこで全く驚くべき事態にぶつかった。それはヨハンセンとシブラントがベルヘン・オブ・ゾームでラートケの商標の付いた6袋の羊毛を差押えたからであるが、係争の発端をなすこの事件についての当事者の陳述には喰い違いがある。

アペンブルクの陳述によると、事態は次のように説明されている。ヨハンセンは前述の24ポンドの他に、2通の債務証書による716 $\frac{1}{2}$ グルデンの債権をハルティゲスとラートケに対して有し、またシブラントも可成りの金額をラートケに対して請求していた。これらの債権の故にヨハンセンとラートケは、ラートケの商標の付いた6袋の羊毛を差押えたのであるが、この6袋の羊毛の仕訳は次の如きものだ。1518年にラートケはアペンブルクに14袋の羊毛を売り、そのうち6袋はすでにハンブルクで渡され、残り8袋はネーデルラントで引き渡されることになっていた。この8袋の羊毛は、3袋はルートケ・フォン・レーデンの船、3袋はベルント・トム・ブロークの船、そして2袋はクラン Hans Kran の船で運ばれ、いずれもラートケの商標を付けていた。この8袋のうち、前の2つの船で送られた6袋が差押えられていたのだ。最後の2袋は、アペンブルクが苦勞して確かめたところ、プルッツェに売却されていた。ハルティゲスとラートケはすでに他に売却済みの羊毛をアペンブルクに二重売却したと考えたアペンブルクは、それを証明するために

ラートケのホラントにおける代理人ツィンメルマンの次のような証言を持ち出した。1523年11月23日のハンブルク市当局の証明によると、ツィンメルマンは1517年12月9日頃ルートケ・フォン・レーデンの船からラートケの商標の付いた „dre Bekke grauw Luneborger schar wulle“ 即ちこの3袋の羊毛を受け取ったが⁶⁾、直ぐにヨハンセンがラートケに対する債権のために差押えたことを陳述している。

6) E. Pitz, *Ein niederdeutscher Kammergerichtsprozeß von 1525*, S. 22.

1518年春にヨハンセンとシブラントによって行われた差押に関するハルティゲスとラートケの見解は次の如くである。自分たちはヨハンセンとシブラントに対し1517年から18年にかけての冬には24ポンドの債務の他は全く負債はない。従って差押を受ける理由は全くない。あるとすればアペンブルクが約束通り復活祭迄に24ポンドをヨハンセンに支払わなかったために差押を受けたのであろう。もし差押がラートケに起因するその他の理由で行なわれたのなら、ラートケはリューネブルクに住んでいて誰の訴訟にも応ずる用意がある。そもそもアペンブルクは差押を直ちにリューネブルクに報告して、その羊毛が合法的に自己のものである証明を自分たちに求めるべきであった。アペンブルクがそうしなかったのは、差押がアペンブルク自身に起因するものであるからだ。

双方の主張の食い違いのもととなったこの差押の理由は不明である。しかしその経緯は、アペンブルクが提出したベルヘン・オブ・ゾームのコリンス Jan Colyns の証言によると次の如くである。アペンブルクはコリンスに3袋の羊毛の売却を委託し、1518年にベルヘン・オブ・ゾームの Paschenmarkt にいたコリンスに送り、コリンスはこの羊毛の売上代金51ポンドを、シブラントの申立によってベルヘンの裁判所に供託させられた。シブラントとヨハンセンは彼らの債権を立証して、この供託した金は自分たちの受取るべきものであることを証明して、後にこの金を裁判所から受け取った。ハルティゲ

スとラートケが依頼したヨハンセンに対する 24 ポンドの支払は, „in dem Bamisch market van Andorpen“ すなわち 1518 年 10 月 1 日に初めてアペンブルクがコリンズに依託し, 彼は直ちにこの支払を済ませた⁷⁾。ところでこの証言は, 前述の同じくアペンブルクが提出したツィンメルマンの供述と差押の日時の点で一致しない⁸⁾。これについてピッツはこう推論する。ツィンメルマンが陳述しているような 1517 年 12 月の差押はあり得ない。北欧航海の冬季休航を考えると, 12 月にベルヘン・オブ・ゾームにいた船が, 翌年 2 月にハンブルクに戻って船積みすることはできない。ラートケの主張するように 11 月 11 日以前に西方に着いていたなら, 冬季休航になる直前にハンブルクに帰ることはできる。さらに 1517 年にはヨハンセンには差押の理由はない。ラートケに対する債権の期限は 1518 年の復活祭であったからだ。そのうえツィンメルマンの供述を含むハンブルクの裁判所記録の文書には, 年数の「17」 „soveteyn“ と商標とが, 削除した跡に記入されていて, 数字は狭過ぎる間隔で記され, 商標は別の色で訂正されている。従って日付に関するツィンメルマンの証言は疑わしい。おそらくツィンメルマンは 1518 年春にベルヘン・オブ・ゾームでルートケ・フォン・レーデンの船からラートケの商標の付いた 3 袋の羊毛 „dre sacke grawe Luneburger schare wullen“ を受取り, これは彼が保管したままヨハンセンによって差押えられた。この差押は, ツィンメルマンが羊毛を売却することは許したが, 売上金は保管しておかねばならなかった。復活祭の Paschenmarkt にはシブラントが現われて, この金を正式に差押え, 裁判所の判決で受け取ったのである⁹⁾。

7) E. Pitz, *Ein niederdeutscher Kammergerichtsprozeß von 1525*, S. 25.

8) 上述, 60 頁.

9) E. Pitz, *a. a. O.*, S. 23–26.

そこでピッツはこの 6 袋の羊毛に関する両当事者の陳述の食い違いに関して次のような結論に達した。ハルティゲスとラートケが陳述しているように, 彼らは 1517 年秋にシブラントに 6 袋の羊毛を売って, 3 袋ずつルートケ・

ファン・レーデンとベルント・トム・ゾームの船で送り、シブラントはこの荷を受け取った。彼らは更に 1518 年春に 6 袋の羊毛を再び 3 袋ずつ同じ船頭によって西方に送ったが、これはヨハンセンとシブラントによって差押えられた。アペンブルクがこの二つの引渡しを一つのもので見たのは、ベルヘンの裁判所の判決の結果に依るものであろう。アペンブルクは 1518 年の復活祭の後にベルヘン・オブ・ゾームに着くや、ヨハンセンとシブラントを差押の故に告訴し、この訴訟の経過の中でシブラントのラートケに対する債権が正当なものだと信じて、ハルティゲスとラートケは二重販売で彼を欺いたと考えた¹⁰⁾。

10) E. Pitz, *Ein niederdeutscher Kammergerichtsprozeß von 1525*, S. 27–28.

3

こういう差押が以後も続発することを恐れたアペンブルクは、ハルティゲスとラートケに宛てて共同企業を解散する意向を 1518 年夏に通告して来たので、ハルティゲスとラートケは早速モラーと対策を協議した。アペンブルクの申出に対する回答である 1518 年 9 月 2 日のモラーのアペンブルク宛の手紙は、取引が継続中なので共同企業の解散は承知できぬこと、ラートケが現地に赴いてシブラントと清算する旨を記している。モラーの知らせた通り、ラートケは直ちにアントウェルペンにやって来て、アペンブルク及びシブラントと交渉を始めた。こうして 1518 年 9 月 19 日にアムステルダムにおいてアペンブルクとラートケの間に次のような協定が成立した。アペンブルクは差押えられた羊毛によって蒙った損害を補償され、またアペンブルクがネーデルラントで買い付けて船積みした 70 ラスト Last の鰯についても、ラストにつき 5 Pfund 3 Schilling で共同責任とすることになった。

しかしラートケとシブラントとの取引関係について抱いたアペンブルクの不信が不当でなかったことは直ぐ証明された。アペンブルクが更にハンプル

クに送るために買い付けた 37 ラストの鯨が、1518 年 10 月上旬にアムステルダムで再びヨハンセンによって差押えられたからだ。一度積み込んだ鯨を波止場に陸揚げさせたヨハンセンは、アペンブルクに対して債権は有しないが、ラートケに対する債権の故に差押えるのだと言い、更にシブラントもこの鯨の差押に加わったため、この 37 ラストの鯨は 11 月中頃まで 5 週間も船積みされず陸上にあった。

ラートケと結んだ協定によって、この差押を解除するのに必要な法的措置を構ずるのは当然だと考えたアペンブルクは、先ずアムステルダムの裁判所に差押えられた商品を解除するために抵当を出し、次いで差押の不当なことを法廷で立証する申立をした。こうしてアペンブルクは 1519 年 2 月 19 日にアムステルダムの審判人裁判所 Schöffenkammer の第一審で、次のような有利な判決を受けた。ヨハンセンがラートケに対する二つの債権に基づいて 52 Pfund 15 s. 7 d. flämisch 並びに経費、損害補償及び利息として 400 Gulden の支払をアペンブルクに求めた件に関し、24 Pfund Grote flämisch 以上をラートケの故に支払うことは承知できぬ旨をアペンブルクが宣誓するなら、その主張を認め、訴訟費用はヨハンセンの負担とする。この判決を不服としたヨハンセンは上告し、ここでもアペンブルクが有利な判決を受けたので、更にブルグントの法廷に迄事件を持ち出し、1523 年末にもこの件は落着せず係属中だった。

この鯨の差押の他に、1518 年春にシブラントによってベルヘン・オブ・ゾームで行なわれた差押の件も片づいていなかった。1518 年 9 月のアペンブルクとラートケの協定では、差押えられた金は差し当りラートケが貸与の形でアペンブルクに用立てることになったが、この差押えられた金の返還を求める裁判をベルヘンで起すことになった。アペンブルクはベルヘン市民バテンセン Claves Batensen と共にベルヘンの裁判所に訴状を出し、1519 年 1 月 31 日に被告の召喚で裁判が開始された。シブラントがベルヘンの裁判所から金を受け取った際、それに対しバテンセンが保証に立ち、シブラントが不当

にこの金を受け取ったことが明らかになった場合には、それを裁判所に返すことになっていた。アペンブルクはこの金は彼のものであるから、これを返してほしいと要求した。1519年2月4日に判決が下り、バテンセンはシブラントが取立てた金を14日以内に裁判所に引渡さねばならなかった。この判決に対しバテンセンは控訴し、アペンブルクは彼と一緒にシブラントに対する新たな告訴をしなければならなかった。しかしシブラントは4回に亘る召喚に応じなかったので、5月20日欠席裁判手続が認められて、シブラントに対し 51 Pfund 11 s. 8 d. の賠償と訴訟費用の負担が命じられた。

しかしこの件はこれで解決したのではなかった。シブラントはこれはラートケと彼との間の問題だからアペンブルクの告訴に応ずる積りはないという態度を堅持したので、保証人として間に立ったバテンセンは窮地に陥った。そこでバテンセンはシブラントの保証に立ったのはアムステルダムのディリクセン Wullebrand Dirix Ben. に依頼されたからだという事情を6月7日に裁判所に出頭して説明した。そこで裁判所はディリクセンに対して、バテンセンへこの金を賠償することを命じた。こうして今やディリクセンもアムステルダムでシブラントを訴えたので、シブラントは6月18日にベルヘンの裁判所に出頭して、彼はブルグントの法廷であるメヘルン Mecheln の der Großen Rate から免訴の認可を得ていることを陳べて、相手方にブルグントの法廷で告訴の説明をさせようとした。

この訴訟についてアペンブルクは、それはハルティゲスの依託で行なったものであるとして彼に損害及び費用の賠償を求めたのに対し、ハルティゲスとラートケはベルヘンでのアペンブルクの訴訟はアペンブルク自身のことで、彼はベルヘンの判決でバテンセンから金を受け取っており、また他の3袋の羊毛の代金もツィンメルマンから受け取っているのだから、訴訟費用は当然アペンブルクが負担すべきだと主張した。

4

ハルティゲス及びラートケとアペンブルクとの間の1518年1月乃至2月にリュウネブルクに設立されて1518年9月19日にアムステルダムで更新された共同企業は、この間にも続けられていた。アペンブルクと他の2人のパートナーとの衝突は、シブラントがアムステルダムの法廷で結局は勝訴した時点で決定的となったと思われるが、その正確な日時は不明である。彼らの間の不和を示唆する最初の文書は1519年10月8日付けのモラーのアペンブルク宛の手紙である。ラートケの述べるところによると、彼がこの日午前中にモラーの書いたこの手紙をハンブルクに送った後、アペンブルクが午後になって彼の許に現われて、決算のためにやって来たことを告げた。ラートケは数人のリュウネブルク市民を呼び皆で公証人モラーの家に赴いて決算を行い、その結果についてハルティゲスとラートケは公正証書を作成した。これを表示すると66-67頁の如くである。

この収支の合計をつき合わせてハルティゲスとラートケはアペンブルクに対し2,776m. 14s. 6 $\frac{1}{2}$ d. の貸しが残っているとした。しかしアペンブルクは後に法廷において、この決算を真向から否定して、彼は当日はリュウネブルクには居らず、この決算は彼の給付と債権を不十分にしか計上していない無効のものと主張した。その後双方の間で1519年12月と1520年1-2月にハンブルクにおいて2回の交渉が行われたが、話しはつかなかった。1520年春にアペンブルクは再び西に旅して、ネーデルラント諸都市の裁判所から証人供述の証明の交付を受けたり、アムステルダムの審判人裁判所記録の抜粋を入手したりして、彼の主張を立証する文書を集めた。

5

その間にハルティゲスとラートケはハンブルクの市裁判所にアペンブルクを告訴した。1520年6月30日にハンブルク市裁判所は9月8日以降の最初

引 渡 の 部							
品 目	種 類	年 次	数 量	重 量 内 訳	単 価	金 額	
羊	夏	1518	袋 6	シュタイン 150,141,152,155, 155,138,	pro Stein 12s.	m. s. d. 668 4 -	
		1518 Michaelis	4 1 1	158,149,163,158 137 156	12s.6 d. 12s. 6 d.	693 14 5	
			14	152plus 4 Pfd, 158,156,164,170, 159,150,178,154, 138,126,149,158, 158	15s.	2,054 7 -	
		1519	3 1 4 2 1 1 4 1	177,188,172 182 160,174,166,150 157,133 135 148 169,190,137,131 105	14s. 14s. 14s. 8 d. 15s. 15s. 15s. 15s. 15s.	2,427 0 8	
		夏 羊 毛 計				5,843 10 1	
		冬		1	92	1 Mark	92 - -
				5	95plus 6 Pfd., 141,150,149,137,	9 s.	462 15 -
			2 5 1 1	134,145½ 150,134,129,131, 119 119 137	9s. 9s. 3 d. 9 s. 9 s. 3 d.	930 5 9	
			3	145,145,134	9 s. 4 d.		
			1 1 1 2 1 1	132 144 135 121,143 148 147	9 s. 9 s. 4 d. 9 s. 9 s. 6 d. 9 s. 8 s. 9 d.	586 13 3	
	冬 羊 毛 計				1,980 2 -		
	羊 毛 計					7,824 4 1	

蜜 蝋		694½ Pfd.	4 s, pro Pfd.	
そのための „in den Kop“			26s.	175 4 —
蜜 蝋		615¾ Pfd.	4 s. 1d. pro Pfd.	157 2 3½
亜 麻		1 Faß, 40 Stein netto	19s. pro Stein	47 8 —
金 貨			25s. pro Stück	300 — —
その übergeld				12 8 —
錫		1 Faß, 4 Schiffpfund	47 Mark	187 8 —
アペンブルクのための代理支払				
Thewes Leman宛				150 — —
Heinrich Leman宛				150 — —
商 品 及 び 給 付 計				1,180 6 3½
引 渡 商 品 計				9,004 2 4½
雑 費				
羊 毛 袋			1 Mark	68 — —
ハンプルク向け輸送の 検量費, 運賃等				53 2 —
2 Stroh Wachs, 1 Flachsfaß. 縄, 検量, ハンプルク向け運賃				2 3 —
雑 費 計				123 5 —
総 計				9,127 7 4½
受 取 の 部				
鯨		90Last u. 9 Tonnen		4,083 1 10
その雑費				55 3 6
現 金				2,322 12 6

の開廷日に被告本人又は代理人が出頭すべきことをアペンブルクに通知し、出頭に応ぜぬ時は原告の要求通り彼の財産が法の定むるところにより処分されることを通告した。アペンブルクは期限通りハンプルクの法廷に現われて裁判は開始された。ハルティゲスとラートケは、裁判のためハンプルクに赴いた旅費を含む訴訟費用は利息を含めて1,000 グルテンもかかったと後に述べたが、1年間の法廷闘争の結果、勝訴したのはアペンブルクであった。それは彼がハンプルクの市会に、妻の縁故で多くの知人を有していたためであった。

この裁判を不服としたハルティゲスとラートケは、ヴェンデ6市の長であるリューベック Lübeck の市裁判所に控訴しようとしたが、リューベック市はハンブルク市で判決を受けた事件は上訴権がないとして、これを却下した。所期の目的を達成し得なかったハルティゲスとラートケは、この上は実力行使で権利を守ろうと決意した。

都市の裁判権を侵害する機会を覗いていたハンブルク市周辺の領邦君主にとっては、ハルティゲスとラートケがハンザ商人の市民義務に背を向けて助けを求めて来たのは、良い口実となった。1522年にザクセン・ラウエンブルク Sachsen-Lauenburg 公領からハンブルクの村落ヴォールドルフ Wohldorf が襲撃されて1人の農民が拉致され、またリューネブルク公領内のエルベ流域でも4人のハンブルク市民が襲われて1,000グルデン以上を掠奪された。

私的紛争がラント平和事件 Landfriedenssache に拡大したこの事態を憂慮したハンブルク市当局は、領邦君主たちによる調停を精力的に求めた。こうして1523年8月13日にザクセン・ラウエンブルク公マグヌス Magnus を仲裁人とし、ブラウンシュヴァイク Braunschweig 及びリューネブルク諸公の派遣顧問を加えた和解 Kompromiß が成立し、アルテンブルク Artenburg においてマグヌス公の名で次のような布告が出された。原告ハルティゲス並にラートケ及び被告アペンブルクは14日以内にリューネブルクの Bürgermeister であるヴィッケデン Thomas von Wickeden とブロームゼ Clawes Bromse を仲裁裁判官 Schiedsrichter として申請し、それから更に14日以内に原告は訴状を提出せよ。続いて4週間以内に被告はその答弁、原告は抗弁 Einrede、被告は第二訴答 Gegenrede、原告は再抗弁 Nachrede、被告は最終答弁 Schlußrede を出す。3回以上の訴答書面 Schriftsatz は双方に許されぬから、調書 Akten は6ヶ月後に完成する。この調書は大学に送られて判断を求められ、2ヶ月後に発表される。両当事者はこの判決を4週間以内に履行する義務を負う。またこの事件に付随したフェーデ及びラント平和の件は、主要事件が片付くまでは凍結されることになった。

この仲裁手続 Schiedsverfahren は 1523 年 9 月 23 日の仲裁裁判官への原告の訴状提出で開始した。ハルティゲス及びラートケの提出したこの訴状は、アペンブルクに対する彼らの要求の根拠を 11 箇条に記した。彼らは会社契約を信じてアペンブルクに 1518 及び 19 年に蜜蠟、羊毛、錫及び亜麻で 9,222 $\frac{1}{2}$ m. 2 $\frac{1}{2}$ s. 4 $\frac{1}{2}$ d. の商品を送り、一方アペンブルクは貨幣、毛織物及び鯨で 6,405 $\frac{1}{2}$ m. 4 s. 4 d. だけを返送したから、通常の代理人費用 Faktorgeld を含み 2,816 $\frac{1}{2}$ m. 6 $\frac{1}{2}$ s. $\frac{1}{2}$ d. がアペンブルクの借になっている。この彼らの債権並びに蒙った損害 1,000 グルデンと訴訟費用を支払って貰いたいというのが原告の要求であった。

定められた 4 週間以内の 10 月 6 日にアペンブルクの弁護士は抗弁書 Exzeptionsschrift を提出した。原告の訴えに対して、アムステルダムとベルヘンの訴訟費用が計上されていないこと、共同企業の最終決算が行われていないことが主張され、この陳述に相手方が反論する場合には被告アペンブルクを証人として召喚するべきだと要請した。

仲裁裁判官はこの抗弁書の写しを原告に渡したので、1523 年 11 月 10 日に原告たちは再抗弁 Replik を提出し、彼らの告発箇条を立証する文書を添付した。

12 月 14 日にはアペンブルクの第 2 抗弁 Duplik が提出され、決算の要求が繰り返され、14 の証拠書類が添付された。

1524 年 1 月 11 日の原告の第 3 抗弁 Triplik は、相手方の証拠文書を詳しく取り上げて、それらは捏造だときめつけた。

これに対し被告の方は 2 月 3 日に提出した第 4 抗弁 Quadruplik で、原告側の証拠文書は形式的に整っているが、内容は偽りだと反駁した。

以上のやり取りの後、仲裁裁判官は 4 月 4 日に訴訟記録をケルン Köln の大学に送って鑑定を依頼した。だが博士たちは、一つには不在のため、また一つには当事者が報酬の支払を怠ったため、翌 1525 年の 2 月 27 日にやっと回答が送られた。そこで仲裁裁判官は 3 月 10 日に双方をリューベックに呼ん

で、判決を云い渡し、原告の勝訴が決定した。

判決の取消を一切禁じたこの裁判で敗けたアペンブルクは、判決云渡を黙って聞いて抗議もせずに立ち去ったが、このまま引きさがる気はなかった。彼は当時エスリンゲン Eßlingen にあった帝室裁判所に上告し、リューベックの判決云渡の6週間後の4月21日には帝室裁判所は新しい裁判を始める三つの令状を作成した。これらの令状は原告が送付することになっていたもので、アペンブルクは1525年6月10日にロストック Rostock から公正証書でハルティゲスとラートケに召喚状を送った。またリューベックの仲裁裁判官は5月23日に判決の執行を禁止する令状を受け取った。

1523年8月13日のマグヌス公の調停では、判決に対して一切の上告を行わないことを双方が同意していたので、リューベック市当局はアペンブルクのこの振舞いに対し憤激した。仲裁裁判官ヴィッケデンはハルティゲス及びラートケの請願を容れて、事件をハンザ会議に持ち出した。1525年7月にリューベックで開かれた会議で請願書が続み上げられたが、ハンザ会議は権限がないという結論に達した。というのは神聖ローマ帝国皇帝カルル5世 Karl V. の義弟にあたるデンマルク国王クリスティアン2世 Christian II. はハンザ同盟を圧迫して王権の強化に努めたので、リューベックとダンツィヒ Danzig はデンマルクに宣戦し、遂に国王は内乱のため1523年には皇帝の援助を求めてネーデルラントへ走ったという経緯があった。更にリューベックが1523-24年に、フガー Fugger 家を筆頭とする上ドイツ大商社に対する反独占運動を熱心に押進した舞台は帝国議会であり、戦術として利用されたのが帝室裁判所であったことを想起すべきであろう。¹⁾

1) Götz von Pölnitz, *Fugger und Hanse*, 1953, S.43.

こうしてハルティゲスとラートケは、リューネブルクの仲裁裁判判決の執行を強行することが不可能だと悟られ、法廷闘争の成果が水泡に帰したのを見た。他方アペンブルクは裁判を帝室裁判所で進めるのをためらったが、おそらく最初は相手方に圧力を加えるだけの意図であったものかと思われ

る。そこで彼はわざわざリューベックにやって来て和解の交渉を始めたが、交渉の過程に関する双方の陳述には相違がある。リューネブルク市長エルバー Diderick Elber が間に立ってアペンブルクが1,000 グルデン支払うことで話をまとめようとした。けれども示談が成立しなかったのは、アペンブルクによると、彼はブラバント Brabant で支払う積りでいたが、ラートケは後に要求を引き上げて、別にもう1,000 グルデンと更に200 マルクを要求したからだと言い、ハルティゲスとラートケによると、アペンブルクが1,000 グルデンは出せぬ、1,000 マルクだけだと云ったためだと説明された。いずれにしても示談の試みは失敗し、もう9月になっていたので、帝室裁判所での対決は避けられぬことになった。

6

1525年9月11日に開かれた帝室裁判所の第1回口頭弁では、ハルティゲス及びラートケ側は弁護士シュヴァーパハ Konrad von Schwapach 博士が代理人として委任状を提出したが、アペンブルクの弁護士クレル Jakob Krell 博士は必要な文書を提出できず、4週間の猶予を求めて、相手方の同意を得た。しかしクレルが上告人の文書を整えて提出したのは12月15日のことで、その文書の中に証拠として含まれていたハンブルク市当局の帝室裁判所宛の11月29日付の書翰が遅延理由を弁明していたので、この遅延理由は認められた。

1526年1月8日に帝室裁判所に、クレルの提出した „libellus nullitatis articulatus“ 即ちリューネブルクの仲裁判決の無効を主張する文書が届いた。無効の理由として、文書提出後2ヶ月の期限が守られなかったこと、仲裁裁判官が普通法による手続によらず、特に争点決定 Litiskontestation を怠ったこと、そして最後に両当事者が iuramentum calumniae 即ち誠実に法に従って問題を解決し悪意の手段を用いないという宣誓¹⁾を、責任を恐れて行なわなかったことが挙げられた。

- 1) ミッタイス＝リーベリッヒ著、世良晃志郎訳「ドイツ法制史概説」改訂版、昭和46年、505頁。

これに対しシュヴァーパハは1月29日に抗弁書を提出して、こう主張した。当事者によって宣誓された和解は一切の上訴を排除したもので、それ故にアペンブルクは判決言渡に際し何らの異議を唱えなかった、また大学の鑑定に期限を定めなかったのだから2ヶ月の期限は鑑定書が仲裁裁判官に届いた日から起算すべきである。従って控訴は却下されるべきである、と陳述した。

さらにシュヴァーパハは1月31日に、アペンブルクに対する財産譲渡を禁ずる令状とハンブルク市に対しアペンブルクの財産差押を命ずる令状の交付を申請した。これに対しクレルは2月5日に異議を申し立て、7日には口頭でシュヴァーパハの抗弁に反論した。これに対しシュヴァーパハは26日に、リューネブルクの仲裁判決に基づいて上告の却下を求める第2抗弁と、令状を要求する再抗弁 Replik を出した。

こうして3月1日に帝室裁判所は最初の中間判決 Zwischenurteil を下し、仲裁判決を無効とする原告の訴えは認められ、被告には告訴に答えて抗弁すべきことを命じ、また財産差押の令状交付の申請は却下された。この判決に対しシュヴァーパハは4月20日に提出した争点決定において告訴条項全体が真実とは異なることを主張して、仲裁判決は無効でないと反論した。しかし彼はクレルの提訴に対し、告訴の条項毎の答弁を義務づけられ、これを10月19日に抗弁として提出した。翌27年1月11日にクレルは主事件の再抗弁と令状に関する抗弁を提出した。これに対しシュヴァーパハは5月10日に第2抗弁と再抗弁を提出した。帝室裁判所がエスリンゲンからシュパイエル Speyer に移動するため生じた休止の後、12月20日にクレルは第3抗弁を提出した。

こうして裁判が長引いたことは双方に大きな経済的打撃を与えずには済まなかった。ハルティゲス及びラートケの側は1527及び28年に2,746マルクを越える経費支出の公正証書を裁判所に出し、ラートケはリューネブルクに

有した2軒の家屋のうち1軒を手放し、もう1軒の家賃はアペンブルクに送った商品代金の支払に当てねばならなかった。彼の弁護士は、彼の財産と信用はアペンブルクによって破滅させられたので、その家族と共に彼の手の働きで生活せねばならなくなると述べている。²⁾

2) E. Pitz, *Ein niederdeutscher Kammergerichtsprozeß von 1525*, S.73.

アペンブルクについても経済的打撃は著しかった。彼はすでに1525年冬にハンブルク市の配達夫 Botenreiter 仕事を引き受けて報酬を受けていたが、1528年には市から馬を1頭買い取ってこの仕事を続け、毛織物商の仕事は閉鎖しなければならなかった。彼は1529年には帝室裁判所の配達夫としても働いた。ところでアペンブルクはこの頃リューベックの市参事会員ファルケ Hermann Falke からエムデン Emden 市に対する債権を300マルクで買い取っている。この債権はエムデンの私掠船が、オストフリースラント伯エズアルト Graf Edzard von Ostfriesland に対するザクセンのフェーデ (1514-17) の時代に行なった掠奪から生じたもので、荷主のファルケが1527年帝室裁判所に訴えていたものであった。ファルケは到底取り戻す見込のないこの債権をアペンブルクに安く譲ったのであるが、アペンブルクはこの債権を彼の訴訟に利用する魂胆であり、この取引を秘密にしていた。しかしこの出費とて、アペンブルクの経済的負担を重くしたことに変りなかった。

1528年2月10日に経済的苦境に陥ったラートケはリューネブルクからザクセン公マグヌスに助けを求めたので、公は2月18日にラウエンブルクから帝室裁判所に宛てて取執しの書翰を送ったが、これは裁判記録には採り上げられなかった。そこでシュヴァーパハは5月18日に帝室裁判所に第4抗弁を提出して、モラーの1519年10月8日の公正証書が真実なことを訊問するように、ザクセン公マグヌス、メックレンブルク諸公その他に命じてほしいと請願した。これに対しクレルは10月14日に持5抗弁 „quintuplicae et in eventum conclusiones“ を提出して相手方の挙げた証人は党派的な疑いがあ

ると主張した。シュヴァーパハが1529年4月7日に提出した最終抗弁 *Conclusio* はこれを根拠のない証言拒否だと反論し、反対にアペンブルクの要求する委員こそ党派的だと陳述した。その後11月29日にシュヴァーパハが彼の最後の訴答書面の若干の誤りを訂正した文書を訂正最終抗弁 *Conclusiones correctionales* として提出した他には、この件に関する法廷の動きは2年以上も見られなかった。

しかしアペンブルクはこの間に新しい手を打った。それは前述のファルケから密かに取得したエムデン市に対する債権で、³⁾ アペンブルクは1529年12月22日に帝室裁判所からエムデン市長ホルネ Habbe Horne 及び市会に対する40マルクの罰金のかかった召喚を実現した。この裁判は弁護士エンゲルハルト Symeon Engelhart 博士が引き受け、博士は1530年4月27日に請願 *Petition* を提出した。

3) 上述, 73頁.

この頃ラートケの働きかけで示談のための会合がリュベックの教会で開かれ、1531年9月29日にアペンブルクがラートケに200グルデンを支払うことで和解の協定ができたので、ラートケの弁護士は8月25日に帝室裁判所に訴訟の中止を申請した。しかしアペンブルクは約束を期限通り守らなかったもので、ラートケは相手方は示談の交渉を口実に判決言渡を引き延ばしていると見て、相手に圧力をかける意図から判決の云渡を帝室裁判所に願い出た。

しかし1531年12月15日の帝室裁判所の判決はラートケを大いに落胆させた。判決は控訴された仲裁手続の無効を確認し、事件は再び1522年の状態に戻った。当事者が再び法廷で争おうと思うなら、改めて帝室裁判所において1審訴訟から始めなければならなかった。

何時まで続くか知れない、結果の確かでない新たな訴訟に踏み切ることを躊躇したハルティゲスは事件から手を引いたので、今やラートケが独りでアペンブルクとの交渉に当たることになった。新たに示談の交渉が始まりアペ

ンブルクは 1532 年にラートケの許にやって来て、一諸にリュースブルク市役所の事務局 Schreiberei で契約書を作成した。それはアペンブルクが 200 グルデンの支払とハンブルクにおける被害者が賠償を受領したというハンブルク市の支払済証明書 Freizahlungsbrief を 1532 年 9 月 29 日までに提出するなら、ラートケは受取を渡し帝室裁判所への告訴権を放棄するという内容であった。アペンブルクは 1532 年 10 月に再びリュースブルクにやって来て、200 グルデンの支払を更に 43 グルデン $\frac{1}{2}$ だけ値切り、一諸に市の事務局に行き契約書を作成した。ハンブルクに帰ったアペンブルクは被害を受けた 4 人の市民と農民に補償をし、ハンブルク市民シェーレ Herman Schele の許に 155 グルデンと 10 バッツェン Batzen を預け、この金はラートケが契約を履行したことを証明する文書を引き渡した時に渡すことにした。これに対しラートケは先に金と支払済証明書を受取することを要求し、事件は行き詰まった。

ラートケはアペンブルクが新たに遁辞を構えているものと判断して、帝室裁判所への告訴を決意した。1533 年 10 月 15 日にシュヴァーパハは帝室裁判所にラートケの委任状並びに告訴の項目書 libellus articulatus を提出し、アペンブルクに対し代理人費用を含む 2,816 $\frac{1}{2}$ m. 7 $\frac{1}{2}$ s. $\frac{1}{2}$ d. の債務の支払と 1,000 グルデンの損害賠償を要求した。

これに対し 10 月 27 日にエンゲルハルトがアペンブルクの委任状と告訴の却下を求める抗弁書を携えて帝室裁判所に現われた。シュヴァーパハの再抗弁は 1534 年 2 月 27 日に出され、3 月 4 日にはエンゲルハルトの第 2 抗弁が提出され、6 月 5 日にはシュヴァーパハの第 3 抗弁が出された。9 月 18 日に中間判決が下り、アペンブルクには抗弁の立証を、ラートケには契約書の提出が命じられた。

しかしながら以後裁判は些細な事柄を扱うだけで、概して争点決定には至らなかった。こうしているうち 1535 年 6 月 4 日にアペンブルクがシュパイエルで死去したことが法廷において報告された。そこでシュヴァーパハはアペ

ンブルクの遺産相続人の召喚を要請した。これに対しエンゲルハルトは 1538 年 2 月 17 日になって、事件はすでに解決しているという遺産受取人の手紙を提出した。1539 年 1 月 15 日に出た中間判決はエンゲルハルトとアペンブルクの遺産受取人に対し、不当な遷延の故に、召喚送達以降、即ち 1536 年 10 月 9 日以後の訴訟費用の支払いを命じた。勿論エンゲルハルトはこれに対し、異議申立を行ない、事件は長引いた。

アペンブルクのエムデン市に対する訴訟も彼の生存中には進捗しなかった。エムデン市は断乎として召喚に応じなかったので、1533 年 6 月 27 日に不応召喚 *Kontumaz* とされ、1536 年 10 月 2 日には召喚の軽視に課される 40 マルクの罰金を云渡され、1539 年 1 月 17 日には帝国アハトを宣告された。帝国アハトの布告は印刷されて関係市町村に掲示され、1540 年 9 月 20 日には強制執行許可書 *Exekutionsurkunde* がシュパイエルで問題となった。原告はエムデン商人の貨物を各地で差押えたが、帝国アハトの実効のないことを示す結果となった。どこにおいても差押物件売却の許可は当局から得られず、差押物件は再び解除されたのである。

しかしエムデン市も召喚に応ずる態度に出て、1540 年 9 月 22 日に帝室裁判所にその弁護士を送った。1540 年 12 月 24 日に下った判決は、エムデンの財政に対する差押の執行を許した。しかしこの判決を実行し、強制執行を行う実力は原告にはなかった。

こうして裁判の結末がつかないで、徒らに時間が経過する間にラートケも莫大な借金を残して死に、1548 年 1 月 21 日に遺産管理委員会が設けられて、債権者は未収金の回収に務めた。

その後この二つの訴訟事件は合一する経過を辿った。というのはアペンブルクの曾てのハンブルクの仲間が、アペンブルクの相続人からエムデンの事件を譲り受けて、彼らは自分たちの費用でこれを進めた。ラートケの遺産管理人たちは彼らを相手として 1551 年 8 月 21 日に彼らの召喚を裁判所に要請した。1554 年 9 月 19 日に出た最後の中間判決でこの召喚は却下され、原告は

訴訟費用の支払を命じられた。

エムデンの事件は 1554 年 7 月 6 日に帝室裁判所の最終判決が下った。原告の請求は事務局手数料を除いて 4,731 gld.rheinisch 28 Kreuzer と査定され、エムデン市にはこの金額を支払えば追放解除が約束された。和解は 1556 年 2 月 27 日に成立し、エムデン市は帝国アハトを解除された。

7

次にこの裁判記録に示されている北欧商業の商品取引関係に目を転じよう。リューネブルクの商人ハルティゲスとラートケがネーデルラントに在る共同企業のパートナーで、後の訴訟相手となったアペンブルクに対して、ハンプルク経由で送ったのは羊毛、蜜蠟、亜麻、金貨、錫であった。¹⁾ 中部エルベ地方から輸出されて 16 世紀にはアムステルダムが積換地となっていたあの穀物はその中に含まれていない。彼ら 3 人の共同企業の資本は大口の穀物取引を行うには不足であったので、彼らは個数品として輸送し得る商品を扱ったのであろう。

1) 上掲表示, 67 頁.

これらの輸出品の大宗は羊毛であった。しかしこれは当時非常に新しい商品で、1480 年のハンプルクの関税定率に初めて „1 Back wulle 3s.“ と現われ、1548 年には行先の記載のない商品として挙げられている。1557 年の税率表が初めて、羊毛を良質の Heidewolle と粗悪品の Scharwolle とに区別している²⁾。中世末期の経済危機はニーダーザクセンにおける余剰農業生産物としての羊毛の生産拡大を招来し、15 世紀中に牧羊業の重要性は増大した。1568 年にリューネブルクの毛織工組合 Wollenweberamt は、商人や居酒屋 Budiker が市の門外で農民の携えて来た 1 シュタインそこその羊毛を買い取っていることを市会に訴えた。当時輸出商人は羊毛集荷人に前渡金を与えて農民から羊毛を集め、これを船積みしたのであるが、ハルティゲスとラートケの時代には、商人はリューネブルクの Michaelis 大市その他で買い取っ

ていたようで、仕上されていない graue Wolle を船積みし、weiße Wolle は毛織工組合に提示した後、余りを積込んだ。ハルティゲスとラートは羊毛を平均 150 シュタイン、価格で 100 マルク以上の包みで送ったが、羊毛の集荷に手を出す資力はなかったので、大口供給者から掛で買って、西方で得た売上から支払をしていた。

2) バルト地域からネーデルラントへの重要輸出品となった羊毛は各地のものがあるが、“laine d’Austrie”, “austiche”, “autruche” などと呼ばれた。Pierre Jeannin, *Les relations économiques des villes de la Baltique avec Anvers au XVI^e siècle*, *Vierteljahrschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte* [以下 VSWG と略記], Bd.43, 1956, S. 204.

これらの商品を売捌くためにアペンブルクが訪れたネーデルランドの市場はどのような状態であったろうか。周知の如くイギリスの毛織物は仕上も染色もされずにネーデルラントに送られ、ここで仕上されて輸出された。古いハンザの互市場 Stapelplatz であるブリュッケ Brügg を急速に凌駕してアントウェルペンがこの取引の中心地となったことは、ブラウンシュヴァイクの指導下にあった南ニーダーザクセンの諸都市にとっても好都合なことだった³⁾。すでに 1514 年にアントウェルペンはハンブルクの対英貿易の取次港として大きな役割を演じ、この年ハンブルクから輸出されたザルツヴェーデル Salzwedel とオスナブリュック Osnabrück の亜麻布、タール、蜜蠟の大部分はアントウェルペン経由でロンドンに達し、また Stalhof のハンブルク商人は英国産織物その他の輸出をアントウェルペンの Bamis 大市宛にした。しかしハンブルクの対英通商に占めるネーデルランドの重要性は減少し、アペンブルクが西方で取引した 1517 年及び 18 年には、ヴェンデ諸都市の対アントウェルペン取引はデンマークとの紛争で阻害された。われわれは彼が主にベルヘン・オブ・ゾームとアムステルダムで取引したのを見た。ベルヘンは 15 世紀以来アントウェルペンと並んでハンザ商人が訪れた市場であって、英国と最短距離に位置した利点を有していた。しかし 1530 年の洪水で港の機能は

失われてしまったが、アペンブルクが訪れたのはその以前であった。アムステルダムは15世紀に毛織物工業の中心地として発展したのみでなく、鯨漁業の根拠地でもあった。ホルントの鯨はショーネン Schonen の鯨に較べて質は劣っていたが、廉価だったので、バルト地域に迄販路を開拓できた。こうしてアムステルダムはハンブルク人の主要取引地となり、1945年にはハンブルク人の礼拝堂が建てられたくらいだ。

- 3) ブラウンシュヴァイク・リューネブルク公の奢侈需要品の供給市場としてのアントウェルペンの意義も注目に価する。P. Jeannin, *Les relations économiques des villes de la Baltique avec Anvers au XVI^e siècle*, VSWG, Bd. 43, 1956, S. 212-213.

この鯨と並んで毛織物がネーデルラントからエルベ地方に送られた主要商品であった。ラートケはこの毛織物をリューネブルクのみでなくバルト地方でも販売し、シュトラールズントやロストックにそのために旅した。アペンブルクもハンブルクに毛織物商の店を有し、小売販売を営んで、西方への旅で不在中は代理の者を置いた。1521年のラートケのフェーデで彼の倉庫が封鎖された時、彼はこれによって大きな損害を受けたと主張した。この封鎖は1日半だけだったから、彼の主張する1,800グルデンの損害は法廷での駆引きから誇張されているが、冬の休航の後最初の船がハンブルクに到着する春は、各地から顧客が集まる書入時であったから、毛織物小売業者にとっては打撃であったことは間違いない。

8

以上見て来たハンザ商人間の長期に亘る係争事件から、どのような商人像が浮かび上がるであろうか。メックレンブルクはアルトマルクの、エルベの支流イエッツェル Jetzel に沿う村々で馬追いとして運送業を営んでいたアペンブルクは、親戚関係を頼ってハンザの商港ハンブルクにやって来て市民権を得て毛織物商を営んだ。この商売は当然ネーデルラントからのラーケン輸入へ進出する機会を与えた。リューネブルク市でネーデルラントの諸都市

と取引関係を有していた2人の商人ハルティゲスとラートケは、アペンブルクと共同企業の契約を結び、西方での業務を彼に委ねた。しかし乍らこの共同企業は、最初の積出商品から紛争の的となった。情報連絡の困難もさること乍ら、外国貿易に必要な記帳の簡単な知識にも欠けていたアペンブルクは、外国貿易において生ずるトラブルを処理する能力を具えていなかった。

その代りこの成り上り者は変り身が早かった。ネーデルラントにおける裁判で埒があかぬと見るや、彼は本来の商売よりも裁判で途を開こうとした。訴訟のため業務が左前となった時、ハンブルク市で配達夫に転身することは、彼にとってはさほど苦痛ではなかったろう。ラートケとの紛争の解決も、最初は1,000グルデンの支払、後には200グルデンに満たぬ額であったのに、支払おうとはしなかった。それなのに彼はエムデン市に対するファルケの債権を買い取っている。これは彼がもう本来の商人ではなくて、一と山当てることを狙っている投機家になったことを示している。その代り彼は残った僅かの財産を1535年1月19日の遺言状が示しているように確保している。しかしこのシュパイエルで作成された遺言状に見られる仲間についてピッツは「大きな商業都市には何時の時代にも見られる敗残者」だときめつけている。¹⁾

1) E. Pitz, *Ein niederdeutscher Kammergerichtsprozeß von 1525*, S. 96.

ハルティゲスとラートケは小規模の貿易商人としては、確かにアペンブルクとは違って経験もあり、ハンブルクとネーデルラント諸都市に代理人を有した本格的なハンザ商人であった。とくにラートケが業務に精通していたことは、裁判記録に含まれている手紙からも覗われ、羊毛が高いので仕入を控えるとか、鯨やラーケンの販売についても綿密な配慮をしている。彼らのネーデルラント商人との確執の実情は明らかでないが、その対応が融通性に欠ける印象は拒めない。特に領邦君主に助けを求めてフェーデに訴えたことは、ハンザ商人らしからぬ振舞と云わねばならない。結局は長びいた裁判沙汰に

よって、ハルティゲスは身を引き、ラートケは破産してしまうのであるが、彼らにとって、裁判は単に利益の問題でなく、商人としての信用がかかっていたのであろう。この際、司法制度の東西の較差、及び北ドイツにおける市会、ハンザ会議、仲裁裁判及び帝室裁判所の競合は、彼らにとって不幸な結果を招いた。

これらハンザ商人の類型把握には、当時のハンザ諸都市及びハンザ貿易の位置づけを欠くならば、未だ充分とは云い得ない。当時リューベックを盟主とするハンザ同盟の最大の関心はズント Sund の航行とフリードリヒ 1 世とクリスティアン 2 世並にグスターフ・ヴァサ Gustav Wasa との戦争にあった。グスターフ 1 世となったヴァサがオランダ商人に通商上の特権を与えた 1525 年は、ヤーコプ・フガーの死んだ年であると共にフガー社のハンガリ企業の崩壊が見られた年でもあった。ペルニッツがハンザ同盟が上ドイツ商人の東方進出を阻止する好機であったと強調するこの時期に、²⁾ハンザ商人の視野は既得権の防衛に忘殺されて、国際経済を展望する暇はなかった。この地に及んだ宗教改革の波は 1534—36 年の伯爵戦争を喚起し、リューベック軍は海陸で撃破されて、ハンザ同盟の凋落を告げる暁鐘となる。16 世紀後半からのハンザの衰亡過程については幾つかの東独史学界の最近の研究があるが、³⁾ここで扱った 16 世紀前葉については未だ探求の余地が多いようである。他日を期してこの問題を改めて取り上げてみたい。

2) G. v. Pölnitz, *Fugger und Hanse*, 1953, S. 48—53.

3) Klaus-Peter Zoellner, Seehandel und Handelspolitik der Hanse in der Zeit ihres Niedergangs(1550 bis 1600), *Jahrbuch für Wirtschaftsgeschichte*, 1970, Teil III, S. 221—238; Antoni Mączak, Die Sundzollregister als eine Preisgeschichtliche Quelle 1557 bis 1647, *Jahrbuch für Wirtschaftsgeschichte*, 1970, Teil III, S. 179—220.